編集後記

水島裕雅

昨年（平成八年）は本学会が十周年を迎えた年であったので、さまざまな行事が行われた。

夏の大会は「芸術――未来へ　芸術学の百年」というテーマのもとに、金田代表委員の基調報告や、岡林洋氏（同志社大学）の特別報告、ならびに中堅・熟年の研究者の発表とそれに基づくふたつのシンポジウム、さらに全国から募った若手研究者の発表など、盛り沢山な内容であったが、二日間に参加者六百人を超す盛況であり、この広島芸術学研究会という名称で始まった組織が真の学会に成長したことを実感することができた。

さらに十二月には「制作と思考　10年の軌跡展」と銘打って、会員三十一名の出品を得た芸術展示が行われた。こちらは出品者が皆十年前の作品と現在の作品を一点ずつ展示するというユニークな企画で、会員ならびに会員以外の多数の人々が新装なった県立美術館の県民ギャラリーまで観賞に来られ、また会期中に開かれた「作家が語る――制作の現場」と題するシンポジウムも会場が満席に近い盛況であった。

夏の大会の発表は、さらに数人の方に執筆を依頼して、また発表者にも加筆をお願いして『芸術――未来へ』と題して勁草書房から今秋出版の予定である。

そこで、本年報には、夏の大会の若手研究者の発表から高梨、奥中、清永、の三氏、例会の発表から廖氏の論文を掲載することにした。

また、巻頭には、金田代表委員から十周年の記念行事全体に関する経緯について、ならびに今後の広島芸術学会のありかたについてのご意見などをまとめていただいた。

今回はさらに、十周年記念大会については、企画から実行まで中心的に関係された青木委員に報告をいただいた。また、芸術展示の経緯については、実行委員長の入野氏から経過報告をいただき、同時に出品者のご意見をアンケート形式でいただいたので、今後の参考のために掲載した。

広島芸術学会は、過去を振り返りつつも、未来を探り、十一年目の新たな歩みを始める。本学会ならびに会員諸氏のさらなるご発展を祈念する。

（みずしま・ひろまさ　広島大学）

藝術研究　第十号　　頒価一五〇〇円

平成九年七月十日　印刷
平成九年七月十一日　発行

編集
発行　広島芸術学会
〒739 東広島市鏡山一―七―一
広島大学総合科学部比較文化研究室気付
TEL　〇八二四―二四―六三三五
or 六三三〇

印刷　㈱ぱプリカプロモーション
〒733 広島市西区楠木町一丁目一四―二六
TEL　〇八二―二九三―七三四四